2014都民芸術フェスティバル 参加公演

第四十四回

邦楽演奏会

日本の四季Ⅱ

長唄

一中節

荻江節

箏曲

常磐津節

義太夫節

清元節

新内節

尺八

2014年3月15日［土］ 国立劇場小劇場

第一部◎開場11:00／開演12:00　第二部◎開場15:30／開演16:00　完全入れ替え制・全席自由

【主催】邦楽連合会
（一社）義太夫協会
清元協会
（一財）古曲会
新内協会
常磐津協会
（一社）長唄協会
（公社）日本三曲協会

【助成】東京都・（公財）東京都歴史文化財団
邦楽振興基金
（一社）私的録音補償金管理協会

【後援】文（公財）日本伝統文化振興財団

ご挨拶

本日は、二〇一四年都民芸術フェスティバル「邦楽演奏会」にお運びくださいましてありがとうございます。

昭和四十六年から続いておりますこの演奏会は、本年をもちまして四十四回を数えます。この催しは、多種の邦楽を一同に集めまして、義太夫協会、清元協会、古曲会、新内協会、常磐津協会、長唄協会、日本三曲協会という七つの団体（邦楽連合会）が力を合わせて、日本の伝統芸能をお聴かせする、他に例を見ない大変に意義のある鑑賞会と自負致しております。

本年は、昨年に引き続き副題を「日本の四季Ⅱ」とし、わが国独特の四季の風情を各曲で味わっていただく事と致しました。曲と曲との間には、ナビゲーターとして女流講談師の神田京子さんの楽しいお話しで綴って頂くなど、皆様に、より邦楽に親しんで頂けますようにと思っております。

何かと不行き届きの点もあるかと存じますがお許しを頂きまして、どうかごゆっくりとご鑑賞下さいますようお願い申し上げます。

邦楽連合会 代表　萩岡松韻

第44回 邦楽演奏会 第一部 日本の四季Ⅱ

12時開演

春　常磐津節　花舞台霞の猿曳（はなぶたいかすみのさるひき）（うつぼ）

夏　清元節　おどけ俄煮珠取（おどけにわかしゃぼんのたまとり）（玉屋）

義太夫節　花競四季寿（はなくらべしきのことぶき）より海女（あま）

秋　新内節　日高川（ひだかがわ）　清姫嫉妬（きよひめしっとの）の段（だん）

尺八　鹿（しか）の遠音（とおね）

冬　長唄　鷺娘（さぎむすめ）

春　一中節　松羽衣（まつのはごろも）

春

常磐津節　花舞台霞の猿曳（うつぼ）

浄瑠璃　常磐津　小文字太夫
　　常磐津　勢寿太夫
　　常磐津　千寿太夫
三味線　常磐津　菊寿郎
　　岸　澤　式松
　　常磐津　菊太郎

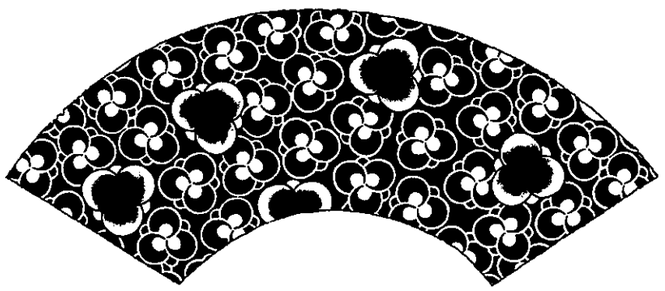
天保九年（一八三八）十一月、江戸市村座で行われた顔見世興行において、四代目中村歌右衛門他で初演。天保のころの、江戸の正月らしさが溢れる、賑やかな浄瑠璃です。作者は中村重助、作曲は五代目式佐。

舞台は、色鮮やかな赤い鳥居の、鳴滝八幡（岩清水八幡）の社頭です。靭（矢を入れる器）を調達して持ち帰るように言いつけられた女大名と奴が、お参りを済ませた所へ、小猿が迷い出て来ます。それを捕まえ、飼い主が売ってくれないと言うので、射殺するとおどかします。飼い主の猿曳き（猿回し）は、嘆き悲しみながら、猿を殺そうとします。そこから一転して。喜びの踊りなど、変化に富んだ楽しい曲です。

常磐津協会

常磐津　小文字太夫（ときわづ　こもじたゆう）
昭和五十七年東京生まれ。十七世家元常磐津文字太夫長男。青山学院大学卒。平成三年初舞台。平成二十五年小文太夫改め十二代目小文字太夫襲名。海外等で実技講演も行う。

常磐津　菊寿郎（ときわづ　きくじゅろう）
昭和五十六年、父・初世常磐津菊寿郎入門。紘寿郎を名のり、大阪中座「男女道成寺」で初舞台。平成十五年浅草歌舞伎「奴道成寺」で立三味線を勤める。平成二十四年二世菊寿郎襲名。



夏

清元節　おどけ俄煮珠取（おどけにわかしゃぼんのたまとり）（玉屋）

浄瑠璃　清元梅光
清元延清恵
清元延志佐枝
三味線　清元延志佐
清元梅弓
上調子　清元延亜希郎

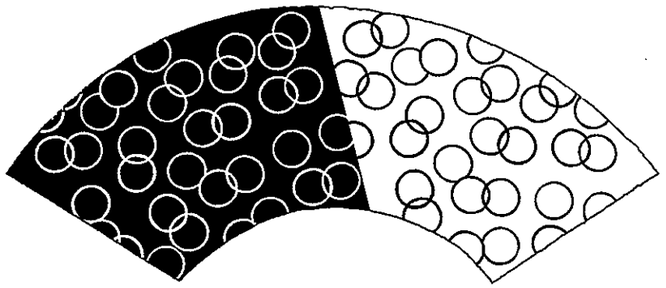
作曲者：初代清元斎兵衛
初演：天保三年（一八三二）七月
江戸中村座で「蔓一筋加賀文台（つるのひとすじかがのふみだい）」の第二番目大切に出された四変化所作事で、玉に関係のある曲で成り立っていました。あとの三曲は「恵比寿」「竜王」「珠取海士」（全て長唄）です。

清元の「玉屋」は江戸の夏の風物詩で、子供の遊び用のシャボン玉売りを題材にした風俗舞踊曲です。「玉屋たまや」と言う売り声を歌詞に取入れ、玉尽くしの唄の後蝶々売り（おもちゃの蝶）の売り声の真似になり、「つい染み易き」からクドキになります。「吹けば飛ぶよな」の投げ節、「伊豆と相模」のおどけ節と当時流行った唄が盛り込まれていて、軽妙で清元の人気曲となっています。

清元協会

清元梅光（きよもとうめみつ）
四世清元梅吉に師事。清元のほか長唄を今藤文子、小唄を竹枝せん男に師事。NHK邦楽技能者育成会十一期卒業。「清元研究会」所属。「清元梅光会」「小唄竹枝みち会」主宰。清元流会員。清元流理事。清元協会理事。

清元延志佐（きよもとのぶしさ）
清元志寿太夫、延志内に師事。夫は清元志佐太夫。「清元和加葉会」所属。「清陵会」「志佐の会」主宰。NHKラジオ「邦楽のひととき」、新派公演「婦系図」などに出演。宗家高輪会会員。宗家高輪会理事。清元協会理事。



夏

義太夫節　花競四季寿（はなくらべしきのことぶき）より海女（あま）

浄瑠璃　竹本綾之助
竹本土佐子
竹本土佐恵
竹本佳之助

三味線　鶴澤寛也
鶴澤津賀花
鶴澤津賀榮
鶴澤駒治

文化六年（一八〇九）二月大坂御霊社内の芝居にて初演。作曲は三世鶴澤友次郎と言われ、その後三世野澤吉兵衛が改訂して今日に伝えられています。義太夫節にはもともと純粋の舞踊作品はありませんでしたが、文化文政期の歌舞伎の変化舞踊の影響を受けて作られるようになりました。この作品もその一例で、題名が示すように、春＝萬歳、夏＝海女、秋＝関寺小町、冬＝鷺娘の四段返しとなっています。「萬歳」は地唄、「関寺小町」は謡曲との深い関係が見られますが、「鷺娘」は長唄の曲とは違っておめでたい内容になっています。本日演奏する「海女」は、海辺で若い海女が、思いを寄せる男性の冷たい態度を恨みつつも、切ない気持ちを語る姿を描いています。

義太夫協会

竹本綾之助（たけもとあやのすけ）
三代目竹本綾之助に入門、竹本綾一となる。NHK邦楽育成会第十期卒業。二〇〇〇年重要無形文化財「義太夫節」総合指定保持者に認定。二〇〇二年四代目竹本綾之助襲名。二〇一一年旭日双光章受章。

竹義邦

鶴澤寛也（つるざわかんや）
鶴澤寛八に入門、一九八五年初舞台。一九九三年豊澤雛代の預かり弟子、二〇〇七年より鶴澤清介預かり弟子となる。二〇一〇年清栄会奨励賞受賞。二〇〇九年重要無形文化財「義太夫節」総合指定保持者に認定。

鶴澤寛也

秋

新内節　日高川　清姫嫉妬の段

浄瑠璃　鶴　賀　須磨寿々
三味線　富士松　菊三郎
上調子　富士松　菊子

世界遺産の和歌山県の熊野古道近辺を流れる日高川、その畔に在る古刹の道成寺。

そこに伝わる安珍・清姫伝説が基となって創られた「道成寺」の作品です。

新内節のものは人形浄瑠璃《道成寺現在蛇鱗》の四段目を初代鶴賀若狭掾が作曲した浄瑠璃。清姫は恋する修行僧の安珍を追って月明りに煌々と照らされた日高川の渡し場に着きますが、船頭が渡してくれません。清姫は今は詮方泣く目を払い、蛇体となって川へ飛び込んで向こう岸へ渡り、安珍の隠れる道成寺の鐘に巻き付き焼き殺します。

恋に狂った女（男）の一途なる行動は恐ろしいもの。

これはまさにストーカーであり、時代を超えて存在する嫉妬と恨みの執念であるといえましょう。

新内協会

鶴賀 須磨寿々（つるが すますず）
東京都出身。父鶴賀直太夫に手ほどきを受け、のち須磨派家元鶴賀新内に師事。昭和三十六年鶴賀須磨寿々の名を許される。平成七年須磨派二代目家元に就任。東京・神戸に稽古場を特つ。新内協会理事。

富士松 菊三郎（ふじまつ きくさぶろう）
昭和三十四年、新派家元三世富士松菊之輔に師事。翌年菊三郎の名を許される。同四十八年より新内舞踊曲を多数作曲。平成二十四年新派富士松宗家に就任。新内協会相談役。

秋

尺八

鹿の遠音（しかのとおね）

尺八　田中康盟
松山龍盟
山戸朋盟
水野香盟
竹村皓盟
徳丸十盟
清野樹盟
芦垣皐盟
長須佳盟

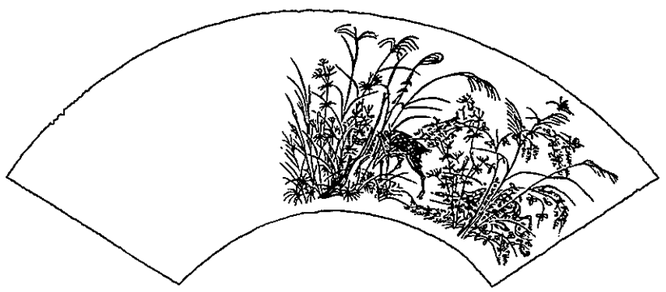
「奥山に　紅葉ふみ分けなく鹿の　声聞くときぞ　秋は悲しき」と詩歌にも歌われ、秋の情趣を表している鹿の声を題材とした本曲で、琴古流尺八本曲中最も良く知られた曲です。

秋深き頃、互いに鳴き交わし、また遠くから聞こえる鹿の鳴き声のこだまする深山幽谷の情景を尺八に移したものです。描写的性格と音楽的華やかさを持つ点で、宗教性を持った尺八本曲の中でも例外的な一曲で、特徴的な旋律が反復され、重なりあいながら進行します。

正式な呼称は「呼返鹿の遠音（よびかえししかのとおね）」といい、一管で演奏することもありますが、通例は二管の掛合いで演奏します。本日は、山口五郎編の三部合奏で演奏します。

日本三曲協会

田中康盟（たなかこうめい）
琴古流尺八竹盟社宗家・人間国宝の故山口五郎師に師事し、竹盟社師範となる。「箏・三絃・尺八鑑賞会を開き、現在まで八十三回開催。尺八リサイタルを六回開催。東京藝術大學音楽学部邦楽科尺八非常勤講師。琴古流協会理事、琴古流尺八竹盟社理事長。



冬

長唄　鷺娘（さぎむすめ）

唄　吉住 小代君
　　吉住 小世宇
　　吉住 小津満
三味線　吉住 小三代
　　吉住 小三友
　　吉住 小しな

この曲は宝暦十二年（一七六二）四月、市村座で二代目瀬川菊之丞が初演し、作曲は富士田吉治と杵屋忠次郎によるものと伝えられています。

雪の降りしきる冬の夜に、水辺にたたずむ白鷺の風情を恋に悩む若い女性になぞらえて描いたもので、江戸長唄初期に作られた作品らしい奥ゆかしい美しさをもった曲となっており、舞踊でも大変人気のある曲です。

はじめに雪中に迷いたたずむ様子、次に娘心を唄い上げるクドキ、そして華やかな傘踊りと続き、最後は地獄の責めに苦しむという非常にドラマチックな曲展開と、随所に入る合方によって非常に聞きごたえのある曲になっています。

長唄協会

吉住 小代君（よしずみ こよきみ）
一九五六年東京藝術大学入学。二〇〇六年、パリ・オデオン劇場、東京、京都で開催された「源氏物語千年紀」をはじめ、吉住会、長唄協会演奏会、リサイタル等に多数出演。

吉住 小三代（よしずみ こさよ）
能楽の家に生まれ長唄の世界に嫁ぎ、幼少より古典芸能の世界で育つ。現在は和の文化の伝承をライフワークとして活動。NPO法人三味線音楽普及の会理事長。長唄吉住会代表。

春

一中節　松羽衣（まつのはごろも）

浄瑠璃　都鳳中
　　都一すみ
　　都志中
　　都了中
三味線　都一中
　　都楽中
　　都勝中

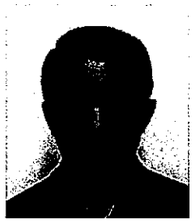
一中節は一六九〇年頃に初代都一中が京都で始めた浄瑠璃（語り物音楽）で、義太夫と同じ頃に始まっています。

一中節は歌舞伎で使われ、江戸でも人気を得ましたが、やがて舞台を離れて民間で伝承されてきました。上品で素朴な味がほかの三味線音楽に与えた影響は大きく、現在は都、菅野、宇治の三派があり、団体総合指定重要無形文化財です。

本日演奏する曲は能の「羽衣」を疎柳（幕府の御連歌師坂昌功）が脚色、初代菅野序遊が一八一五年頃に作曲したものです。

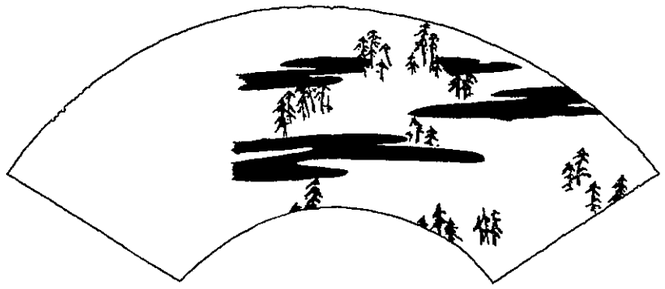
駿河の国三保の浦に住む漁師伯竜が、松の枝に羽衣を見つけ、持って帰ろうとすると天人があらわれ、羽衣がないと天へ帰れないから返して欲しいと嘆きます。可哀想に思った伯竜は返す代わりに天人の舞を見たいと所望した所、天人は舞を舞って天に帰って行くのでした。

古曲会



都鳳中（みやこほうちゅう）
昭和十七年、東京生まれ。
昭和四十四年より十一世都一中師につき一中節を始め、都鳳中の名を許される。
一般財団法人古曲会監修の「古曲の今」でCDを発表。
長唄唄方、杵屋巳紗鳳。

都一中（みやこいっちゅう）
昭和二十七年、東京生まれ。
昭和四十六年、東京芸術大学音楽学部に入学（翌年中退）、音楽学を小泉文夫に師事。
一中節を十一世都一中に師事し、平成三年十二世都一中を襲名、宗家継承。
常磐津三味線方、常磐津文字蔵。



第44回 邦楽演奏会

第二部 日本の四季Ⅱ

16時開演

春 新内節 里空夢夜桜（夜桜）

夏 荻江節 八島

常磐津節 節句遊恋の手習（夕涼三人生酔）

秋 箏曲 秋の言葉

義太夫節 伊賀越道中双六・沼津の段

冬 清元節 春夜障子梅（夕霧）

春 長唄 京鹿子娘道成寺

春

新内節　里空夢夜桜（夜桜）

さとのそらゆめのよざくら

浄瑠璃　鶴賀 伊勢吉
三味線　新内 勝一朗
上調子　鶴賀 伊勢一郎

江戸時代の天保期の鶴賀流二代目家元の鶴賀鶴古作曲の、春宵の吉原を舞台にした作品で、遊女「園春」と間夫（まぶ・恋人）の「清吉」の悲恋物語。

「春の夜の夢かうつつか床の中　二人は顔を見合わせて…」と語り合います。

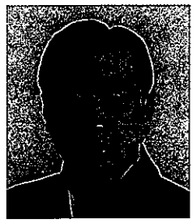
園春に身受けの客が現れたのを知った清吉は「そなたの為に自分は身を引こう」と打ち明けます。

園春は「私の所為で勘当受けたお前と切れて何の楽しみがあるものぞ、一緒に廓を抜けましょう」と、女性は昔から気が強いもの。それではと二人手を取り足早に、園春は男の姿にさまを変え、廓の騒ぎに紛れてこけつ転びつ逃れんとしますが…。

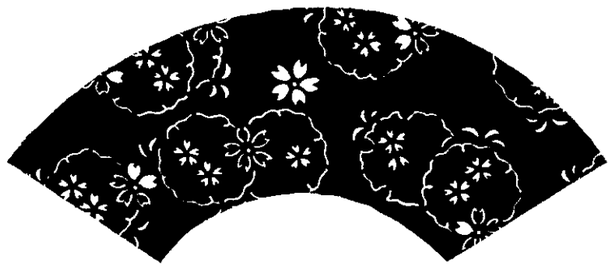
新内初期時の明烏や蘭蝶と同じ端物構成ではありますが、軽く粋な作品となっています。

新内協会

鶴賀 伊勢吉（つるがいせきち）
平成元年、鶴賀流第十一代目家元鶴賀若狭掾（人間国宝）に師事。平成三年、鶴賀伊勢次郎の名を許される。三味線方として、国内外での演奏会、ラジオ等で活動。平成二十四年、浄瑠璃方に転向、鶴賀伊勢古の名を許される。鶴賀流家元副代行。



新内 勝一朗（しんない かついちろう）
東京生れ。富士松志賀三郎を祖父に、初代新内勝一朗を父にもち、六歳より父に指導を受け九歳で初舞台を勤める。十六歳で新内勝次朗に、平成二年に新内誠十朗に改名、平成十三年に勝新派二世家元新内勝一朗を襲名する。新内協会理事。



夏

荻江節　八島（やしま）

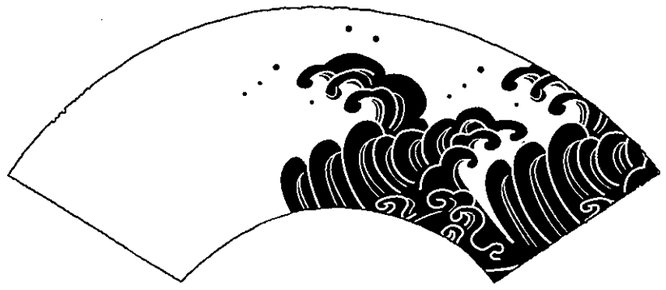
唄　荻江 里泉
　　荻江 裕
三味線　荻江 里一
　　荻江 里暢

荻江節は一七七〇年頃、初代荻江露友が江戸吉原で始めた長唄の歌い方です。
はじめは単に「荻江」「荻江の長唄」と言われ、吉原で盛んに唄われていましたが、幕末に地歌を取り入れるなどして完成しました。
三味線では上調子を使わず、お囃子を入れないのが原則。一中節と同様に団体総合指定重要無形文化財です。
本日演奏する曲は能の「八島」からですが、直接ではなく同名の藤尾勾当作曲の地歌から移したもの。幕末に成立したと言われますが、明治十二年成立説もあります。
のどかな春の夜、西行法師が八島で、能登守教経の亡霊に出会い、壇ノ浦での源平の戦いの様子を聞くという場面です。

古曲会

荻江 里泉（おぎえ りせん）
昭和二十六年、静岡県生まれ。
昭和四十九年、東京芸術大学音楽学部邦楽科を卒業。
荻江阿久里に師事。
河東節 山彦良波、東明流 東明吟泉、小唄 竹枝せん男。

荻江 里一（おぎえ りいち）
昭和四十四年、東京生まれ。
三歳で父 松永鐵十郎の指導で長唄を始め、家元九世松永鉄五郎師に入門。
荻江里泉に師事し、平成二十四年荻江里一の名を許される。
長唄松永派三味線方、松永忠一郎。



夏

常磐津節　節句遊恋の手習（せっくあそびこいのてならい）（夕涼三人生酔）

浄瑠璃　常磐津 八重太夫
常磐津 仲重太夫
常磐津 文重太夫
三味線　常磐津 一寿郎
常磐津 美寿郎
岸 澤 満佐志

天保四年（一八三三）六月　両国の中村楼で、五代目岸沢式佐が、改名披露宴の時に出来た曲で、三代目常磐津小文字大夫他の出演で演じられました。

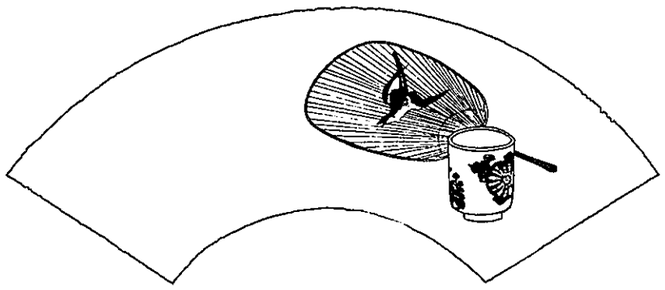
筋は酒好きの三人が、大川（隅田川）の舟遊びで、呑み進むうちに『笑い上戸』『怒り上戸』『泣き上戸』の本性が現れ出て来るという、面白く他愛のない曲です。

本名題は「節句遊恋の手習い」ですが、三人生酔いの趣向の曲が多くあり、歌詞の中の〈名にし涼みの夕景色〉より取って「夕涼み三人生酔」といわれています。

常磐津協会

常磐津 八重太夫（ときわづ やえたゆう）
昭和十六年群馬県生まれ。平成四年、常磐津八重太夫リサイタルを初めて開催し、文化庁芸術祭賞を受賞する。平成十二年六月、常磐津節保存会会員。平成二十五年五月叙勲、旭日双光章授与される。

常磐津 一寿郎（ときわづ いちじゅろう）
昭和二十二年生まれ。昭和四十三年常磐津菊路太夫に入門、常磐津菊寿郎にも師事。同年一路郎許名。昭和五十九年一寿郎と改名。平成元年清栄会奨励賞、平成十七年十二代富本豊前継承。常磐津協会理事、常磐津保存会理事。



秋

箏曲　秋の言葉（あきのことのは）

箏替手　福田栄香
箏本手　山口尚子
黒田睦子
秋澤三枝
安保りつ子
池田道子
大嶋敦子
小島尚子
幸野浩子
加茂宙生
福田大貴
鉢嶺功童
逸見煌童
津久井龍童
忍田大童

尺八

明治十年頃、箏曲の中では明治新曲といわれる時代の作品です。歌詞をご覧いただきますとお分かりになるとおり、秋の虫の音に合わせて遠砧が聞こえてくるというような、嵯峨野の最も美しい季節の情景を描写していながら、元来は平家物語の小督の局の物語に取材した作品ということもあり、曲調には物寂しく悲しい雰囲気も漂います。

箏は手事（歌の無い器楽的な部分）で、本手・替手の二重奏になり、一層と情緒溢れる砧拍子が美しく響きます。この度は、箏と尺八との合奏でお聴き頂きます。

日本三曲協会

福田栄香（ふくだ えいか）
幼少より父福田種彦に師事。三歳で初舞台。NHK邦楽技能者育成会卒、文化庁国内芸術研修生として学ぶ。国内外での演奏、教授活動他、普及活動にも励む。文化庁芸術祭優秀賞受賞。生田流三ッの音会三代家元。日本三曲協会理事。

秋

義太夫節

伊賀越道中双六・沼津の段

平作　竹本駒之助（人間国宝）
十兵衛　竹本越孝
お米　竹本越京
三味線　鶴澤津賀寿
ツレ　鶴澤三寿々

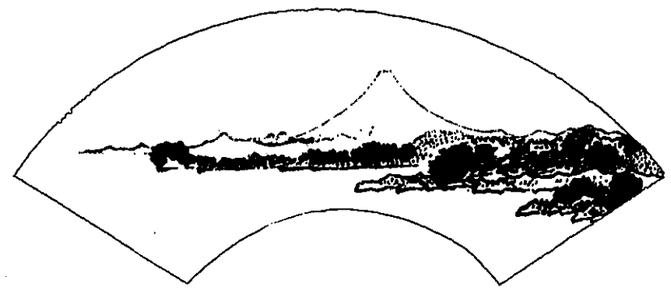
天明三年大坂竹本座にて初演。日本三大仇討ちの一つ「伊賀上野の仇討ち」を素材とした芝居を近松東南が浄瑠璃にし、後に近松半二が改作しました。仇討ち物なので、幕府からの咎めを避ける当時の慣例として、史実とは人物名を変えています。関東管領上杉家に仕える和田家の子息志津馬は、沢井股五郎にそそのかされ恋仲の遊女瀬川身請けのために家宝の刀を質草にします。これによって志津馬は勘当され、和田家の家督を狙う股五郎は志津馬の父を殺し、親戚の沢井城五郎に匿われ逃亡を続けます。一方、志津馬の姉お谷の夫となった唐木政右衛門は舅の仇討ちに助太刀するための画策をします。最後は無事仇討ちが果たされるのですが、それまでには多くの登場人物が命を落とすという波瀾万丈の物語です。

「沼津の段」は、落ち延びようとする股五郎の案内役として沢井家に出入りの呉服商十兵衛が九州相良へ行く途中、沼津で荷物持ちの老人平作を雇うところからはじまります。途中、平作の家で休んでいると、平作は幼い時に別れた実の父親であり、その娘、実の妹でもあるお米が遊女瀬川であり、股五郎を仇と狙う志津馬の恋人であったことがわかります。ことの次第を知った平作が股五郎の行く先を命がけで聞き出すという筋書きですが、本日は前半部分の十兵衛と平作が平作の家に着くまでのやりとりをお聞きいただきます。

義太夫協会

竹本駒之助（たけもとこまのすけ）
一九四九年竹本春駒に入門。文楽の諸師匠方に師事。一九七〇年四世竹本越路大夫の門人となる。一九九九年重要無形文化財義太夫節個人指定保持者（人間国宝）認定。二〇〇三年紫綬褒章受章、二〇〇八年旭日小綬章受章。

鶴澤津賀寿（つるざわつがじゅ）
竹本駒之助に入門、三味線を四代目野澤錦糸に師事。一九八六年初舞台。鶴澤重輝の預かり弟子となる。一九九六年芸術選奨文部大臣賞新人賞、一九九九年ビクター財団賞奨励賞受賞。二〇〇九年重要無形文化財「義太夫節」総合指定保持者に認定。



夕霧

清元節　春夜障子梅（はるのよしょうじのうめ）（夕霧）

浄瑠璃　清元 美寿太夫
　　清元 清美太夫
　　清元 國恵太夫
三味線　清元 美治郎
　　清元 昂洋
上調子　清元 美一郎

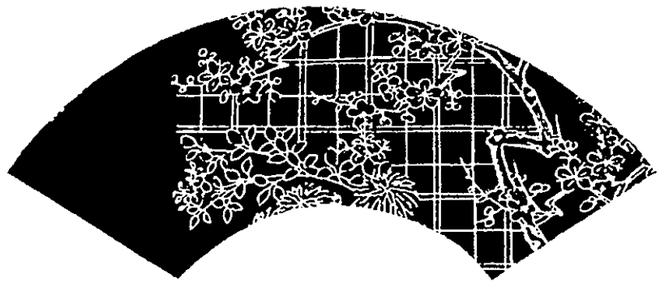
作曲者：原曲の富本「春夜障子梅」は佐々木市四郎
初演：富本は天明四年（一七八四）正月、清元は文久三年（一八六三）九月。
富本のもとになった原作は、宝暦七年（1757）正月に初演された近松門左衛門作の義太夫「夕霧阿波鳴門」の上巻「吉田屋の段」を改作したものです。

落ちぶれた伊左衛門が寒い師走のある日、紙衣姿で馴染の傾城夕霧のいる吉田屋を訪れますが、夕霧は他のお客と遊んでいる様子で、伊左衛門は嫉妬の気持ちを宮園節の「ゆかりの月」の唄に託して表します。夕霧は伊左衛門に走り寄りますが、「万歳傾城」と言って夕霧を罵ります。しかし主人喜左衛門から、伊左衛門の勘当が解け、夕霧の身請けも整ったと告げられめでたしめでたしとなります。

清元協会

清元 美寿太夫（きよもと よしじゅだゆう）
父清元若寿太夫、母清元延若福、兄は人間国宝清元榮三。六世清元延寿太夫、清元栄寿郎に師事。アルバム「花吟集」出版。第一回清栄会奨励賞、平成四年度芸術祭賞受賞。美治郎氏と「二人会」結成。宗家高輪会会員。宗家高輪会理事。清元協会理事。

清元 美治郎（きよもと よしじろう）
清元寿國太夫、一寿郎に師事。第三回清栄会奨励賞、第三回日本伝統文化振興財団賞、第二十四回松尾芸能賞、第四十二回東燃ゼネラル音楽賞受賞。「美鳳会」主宰。美寿太夫氏と「二人会」結成。宗家高輪会会員。宗家高輪会理事。清元協会理事。



春

長唄　京鹿子娘道成寺（きょうかのこむすめどうじょうじ）

唄
杵屋彌十郎
東音渡邊雅宏
和歌山富朗
今藤龍之右
杵屋彌十彦
（人間国宝）今藤政太郎
今藤美治郎
今藤政十郎
今藤龍市郎
今藤長龍郎

三味線
中川善雄
藤舎成光
藤舎呂凰
藤舎呂船
藤舎呂秀
藤舎華鳳

笛
藤舎呂船

小鼓
藤舎呂凰

立鼓
藤舎呂船

大鼓
藤舎呂秀

太鼓
藤舎華鳳

今も歌舞伎などで非常に人気のあるこの曲は、宝暦三年（一七五三）三月、江戸中村座で初代中村富十郎が初演したもので、初代杵屋弥三郎による作曲と伝えられています。内容は日本の古典芸能の題材として広く採りあげられている安珍・清姫伝説の後日談で、桜満開の春の紀州道成寺を舞台に、白拍子花子に化けた清姫の霊が舞い、やがて因縁のある鐘に取り憑いて本性である大蛇の姿を現すまでを唄っています。

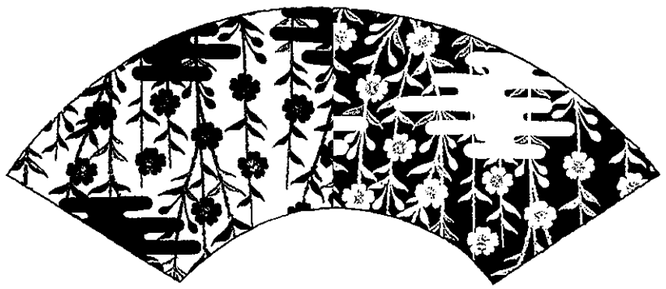
中盤、「可愛らしさの花娘」の歌詞の後に入る、俗に「チンチリレンの合方」と呼ばれる華やかな連弾きの合方と、そこから雰囲気を一転させ情緒をもって演奏されるクドキと呼ばれる箇所が、それぞれ三味線と唄の聞かせどころとなっています。

長唄協会

杵屋彌十郎（きねや やじゅうろう）
一九三七年東京生まれ。父は初代杵屋彌之介、母は稀音家六柳。初代吉住小真治、八世稀音家三郎助に師事。一九九八年十代目杵屋彌十郎を襲名。杵屋彌十郎派家元。長唄協会理事。

今藤政太郎（いまふじ まさたろう）
一九五九年東京藝術大学卒業。五四年三世今藤長十郎、綾子師に師事、六三年二世今藤政太郎襲名。二〇〇五年芸術選奨、〇八年旭日小綬章、十三年重要無形文化財認定。国立劇場養成課、桐朋女子短大、国立音大にて講師を歴任。

藤舎呂船（とうしゃろせん）
四世藤舎呂船、藤舎せい子に師事。東京藝術大学卒業。邦楽、舞踊、歌舞伎等の囃子演奏や創作、教授活動にも力を入れる。松尾芸能賞優秀賞、エクソンモービル音楽賞受賞。囃子藤舎流六世家元。長唄協会常任理事。



本日のナビゲーター

神田京子（かんだ きょうこ）

一九九九年二代目神田山陽に入門。他界後は神田陽子門下へ。日本講談協会・公益社団法人落語芸術協会所属。各講談会や都内の寄席に出演の傍ら、独演会・地方公演・他ジャンルとのコラボレーション、講談ワークショップ、国際交流活動（第十九回内閣府主催世界青年の船〈二〇一〇年四月ドイツ・ニッポンコネクションより招聘フランクフルト公演〈二〇一三年七月国際交流基金より支援を得てモンゴル公演など）等、くるくる展開中。他テレビ・ラジオ出演（近年出演：ＮＨＫ総合テレビ「演芸図鑑」・ＮＨＫラジオ第一「日曜バラエティー」・東海ラジオ「よみがえる話芸　節談説教」〈二〇一二年度文化庁芸術祭ラジオ部門大賞受賞、第三十九回放送文化基金賞本賞受賞〉など）。エンターテイメント性溢れる講談を目指す。二〇一四年五月一日より真打昇進、各地でお披露目公演を予定。東日本大震災後、東北各地を中心に民話を訪ね歩き、一口講談にして行くことをライフワークとして始めた。

公式ブログ「京子喫茶室」http://blog.kandakyoko.com/

邦楽連合会（事務局　日本三曲協会内）

一般社団法人 義太夫協会	事務局	電話 03-3541-5471	http://www.gidayu.or.jp
清 元 協 会	事務連絡所	電話 03-3739-6765	http://www.kiyomoto.org/
一般財団法人 古曲会		電話 03-3348-5021	
新 内 協 会		電話 03-3260-1804	
常 磐 津 協 会	事務局	電話 03-3636-2220	http://www.tokiwazu.jp/
一般社団法人 長唄協会	事務局	電話 03-3542-6564	http://www.nagauta.or.jp/
公益社団法人 日本三曲協会	事務局	電話 03-3585-9916	http://www.sankyoku.jp/

平成27年の邦楽演奏会は3月7日(土)を予定いたしております。